

一葉没後の「智徳会雑誌」

——一葉関係の記事を中心として——

山根賢吉

前号掲載の「智徳会雑誌」と樋口一葉は、一葉追悼記事の紹介で終ったが、その後も「智徳会雑誌」に一葉関係の記事が散見し、それらを紹介するとともに、その後の「智徳会雑誌」の変遷についてもふれてみたい。

先ず一葉関係の記事としては、第三十八号（明治30年2月28日発行）の「雑録」欄に、松窓子の「時文」があり、その中の一つに「昨年の文壇」と題するものがある。それは先ず、

昨年の前半紀は、一葉女史の小説界にして、後半紀は、柳浪子の小説界なりきと雖も、この間、紅葉露伴の両子は、尚依然として各一方の巨擘なりき

と総括している。たしかに明治二十九年には、紅葉は「多情多恨」の連載を完了し、その間、「冷熱」「浮木丸」「青葡萄」など

の単行本を刊行し、一方の露伴は「風流微塵蔵」の第二冊から第四冊までと「ひげ男」を刊行しており、この年は「両巨擘」ととっても実り多き年であったことは事実である。続いて松窓子は、

一葉女史が哀れなる昨年中の形見は、「わかれ道」、「たけくらべ」、「われから」等なりき、これ皆女史が一種の悲観に映じたるものにて、実に満紙涙痕の哀史なり。女史が描ける人物は、運命の我に命するに任せて徒らに慟哭せず、不円満、不完全なる闇暗の裡に、然かも一点の微光を尋ねて満足するものなりとはいへ、露伴子か写し出す如く、悟り得たるにあらず、飽くまでも死地の中より生地を夢むなり。斯くして終に免れ能はざりしも、彼は又慢に痛器せざるな

り、唯「まゝよ」と不幸なる運命の中に漂はんとす。何ぞ其心情の優さしきや。然れば凄愴殆と人の肺腑に徹して、筆墨嗚咽、仰視に堪へざるありと雖も、女性が筆としては余りに冷刻なり、余りに忍刻なり、余りに理性に過ぎたり。而してこの感情より理性に強き所、或は女史が燃ゆるが如き熱涙の融化せられたるにあらざるか。嗚呼女史は薄倖の才媛、悲痛慘愴たる半生の境遇は、女史をして多涙多恨の人とならしめき。

と、前後矛盾するような文章ながら、一葉の作品と人について所感を述べた後、

「に・ごり江」出て、文壇を騒動せしむるや、作界の傾向、漸く材料を泥水社会に藉らんとするに至り、楊台の花、狭斜の月を描くもの靡然として起りたるが、其内独り柳浪子の「今・戸・心・中」は、成功に近きものと称せられ、これと同時に材を醜猥の境に採り、賤婦を描き、或は廓内の人物を錯綜混合するは、文士の品格を下すものなりなどいふもの起り、延いて柳浪子等を目して、徒に通を学び、粹を氣取るものなりとして排譲せんとせしが、亦假令地汚れたりとも、純潔なる涙のなきにあらずとて、或は褒し、或は貶し、未だ容易に決すべくもあらざりし間に、同じ子の「河内

屋」、統て「浅・瀬・の・波」の出ずるに及んで両論者共に手をあげて柳浪を迎へぬ。これ等柳浪子の世話物には暇瑾も少なからず、且は脚色不自然なる節もありしが、子が深・醉・なる観察と勁・瘦・なる会話と、又其趣向と思想の複雑にして布置の妙なることによりて、其少暇はさまでに気付かざりしが、其性格の描写といひ、言語の活動といひ、一葉女史が「たけくらべ」と併せ称せらるべきものにて、実に柳浪子が去る一年間に於る傑作なり

と、「に・ごりえ」の後に発表され、狭斜を描いた柳浪の「今・戸・心・中」の褒貶を紹介し、続く「河内屋」「浅瀬の波」を「たけくらべ」に比すべき傑作と称賛している。

これにつぐ一葉関係の記事としては、第四十一号(明治30年8月17日)の姑洗執筆の「片々集」に次の記事がある。

○一葉全集(再版)

いかなれば此頃の吾小説界は、斯くも浅ましき姿をのみ呈するにや。これにつけても想ひ起すは、逝きし一葉女史也。女史の名は「濁江」によりて始めて世に知られ、次で「たけくらべ」出るに及びて其名益高く、巾幗作家の中にありて優に突々たる異彩を放ちたるのみならず、精其微超凡なる観察力と、奇警にして犀利なる筆才は、鬚眉の士と雖も

中々に及び難く、誠に当代得易からざるの才媛なりし事は、今も尚説者諸君の追想し玉ふなるべし。鳥兔匆匆、今や漸く女史が一周年も近かんとするに当り、再び茲に女史が半生の満紙涙痕の哀史の再版を見るに及び、吾人豈一片の涙なきを得んや。

初版の全集は本年初め、乙羽子の編輯に依りて世に頒はれたれど、時や折悪しく年末の事として、常さへ閑暇なき子の、殊には吾智徳会新年発兌雑誌の編集校訂と重なり、為に愈繁劇を極めたるが、例に依つて慧敏精勵の子は、僅々の日限中に兩者六百頁内外の編輯校正を加へたる事として、用語或は挿畫等尚子の意に満ざりしもあり、且は又女史が傑作の一たる「別れ道」の、民友社との交渉整はざる為に集中に洩れたるは、大に子の遺憾となせし処なるが、それも凡て再版の時にはまさんとにて新年早々に吾人の初版全集を見るを得たる次第なりき。然ればこの度の再版は子か識せる如く、緑雨子の厳正なる校訂を経たるのみならず、先にもれし「別れ道」等も凡て悉く収められたれば、茲に全き女史が不死の大文字に接するを得たるは、独り乙羽子の満足なる許りか、治ぬく人の喜ぶ所なるべし。然れと尚吾人の飽す思ふは、眞の巻首に挿まれたる美人の彩色畫を、銅

版の肖像にかへて、態々為山子に挿毫させし位なれば、今少しは女史の面影に似てあらまほしきものと。

ここで言う「再版」とは、明治三十年六月、博文館から刊行された「訂校一葉全集」のことで、たしかに明治三十年一月刊の「一葉全集」(博文館刊)に収められていなかった「わかれ道」が新たに加えられている。しかし「わかれ道」のほか、「この子」も加えられているわけで、これについては右の文章には記されていないが、「別れ道」等もとあるので、小品「この子」が加えられたことも執筆者にはわかつていたであろう。

また、「一葉全集」巻頭の、鈴木華村筆の口絵が「訂校一葉全集」では、下村為山筆の肖像画に変えられているのも、右の指摘通りであるが、これが一葉の実像に似ていないかどうかの判断はつきかねるが、執筆者は生前の一葉と会っていて、こう記したのであろう。執筆者はあるいは泉谷ではないかとも思われる。

右の文章中の「誠に当代得易からざる才媛なる事」は、「三人冗語」の「たけくらべ」評中の「まことに獲易からざる才女なるかな」の余響と言うべきであろう。ただ、この文章で、大橋乙羽が「一葉全集」の編集のみならず、「智徳会雑誌」の編集にも携わっていたことは注目すべきであろう。乙羽はすでにこの雑誌の第二十五号(明治29年1月23日)に、小説「鎗持勘助」を

発表しており、「智徳会雜誌」が創刊当初の「教育勸語の精神を買取する」（発行之辭）という意図から、次第に文学的要素を加えて行く過程には、泉谷らの文学青年の存在とともに、乙羽が何らかの役割を果しているのではないかと推測される。

右の文章は更に、

殊に吾人の口惜しき心地するは、世の人は「われから」を以て女史の絶筆なりとすと雖も、実は吾会より親しく女史に物し玉はらんことを請ひ、女史も神氣爽れず、屢々病魔に冒されながら、強ちの請ひに押して遅筆の推敲又推敲、想を練り思ひを凝し、殆んど一字一句の間に女史が全き力を注きたる「ひるかほ」は、これなれ誠に女史が絶筆にして、稿漸く中なるに及び噫、女史は筆を手にして病辱に倒れたり。以来客を謝して徐ちに療養を加へられしが、天年を假さず、溘然として逝きぬ。女史妙齡筆を執るや動刻、竟に職に斃る、悲しむへき乍ら又深い哉。噫吾人は今果敢なき追懷を起して、熱淚滂沱殆んど言ふへき所を知らず。唯この篇の完終にしてこの集に出つを得たれば聊か女史の瞑すべかりしに。然れどこは吾会女史の令妹國子君に乞ひて親筆の儘、写真石版に附して江湖に配布し、以て女史生前の厚情に酬はんことを期す。

あつめられたる諸篇については、既に諸大家の明晰なる評論もありたることなれば、今更生じい拙劣の之れを繰返すの要なるべし。只記せよ。薄倅なる、悲惨なる同情ある、詩眼ある当代の才媛一葉女史の半身肖像は、正にこの再版一葉全集たることを。

この文章中、「ひるかほ」こそ一葉の絶筆だとは、「智徳会雜誌」として当然の言であらう。「智徳会雜誌」の関係者は、「ひるかほ」の完成されなかつたことを、どんなに残念に思ったことであらう。ただし、その「ひるかほ」を「令妹國子君に乞ひて親筆の儘写真石版に附して江湖に配布し」たかどうかの事実については、寡聞にして知らぬところである。

以上が一葉没後の「智徳会雜誌」に見られる一葉関係の記事である。

さて、「智徳会雜誌」は、その第三十一号（明治29年8月15日）に、一葉の書簡と和歌を掲載した後、第三十二号（明治29年9月30日）で、小花醉樵の小説「板金剛」を載せ、次の第三十三号（明治29年10月31日）で、それを完結させるとともに、白魚女史の「結髪」を載せ、次の第三十四号（明治29年11月21日）に鷗夢の「あさがほ」を掲載している。一葉追悼文を載せた第三十六号には小説はないが、同号の巻頭に「本誌の改革」と題する一文を発

表している。その一部を示すと、

豈我会の悠々手を拱して、空しくこの凋落に居るべきかは
(中略) 今回の一大改革の如き、一は我会の栄名を後世に伝
へ、一は是れによつて我会の基礎を強固たらしめ、先に期
したる遠大の宿望を成就せしめんとするに外ならざるな
り

とあり、「智徳会雑誌」の「凋落」を食いとめるために「一大改
革」をすると宣言している。その具体策は、同号巻末の赤紙に、
「一大革新に臨んで」と題して、次のように記されている。

漸く学術的寄稿の乏しく、文学的寄稿の本紙大部分を占む
るに至り、殆んど文学雑誌たらんとするの傾なりき、(中略)
茲に於て予輩は次号より一大革新を行ひ、断然学術部と文
学部を分ち、月々十五日を以て替々に発刊し、大に両部の
平等を得て以て、一層諸君が機関たるに便せんとす。

明治廿九年十二月

智徳会雑誌編輯部

果して、その次の第三十七号(明治30年1月1日)は「文学部」
と云うべく、「小説」欄の目次は次のようになってゐる。

はしがき……………文尾崎紅葉君
……………繪武内桂舟君

踏切の番人……………江見 水蔭君

三日判事……………小栗 風葉君

人ちがひ……………石橋 思案君

部 人……………柳川 春葉君

去年の春……………広津 柳浪君

また、「告白」として、

思ふこと……………乙 羽 庵

が掲載されており、まさに硯友社作家の勢揃いの感がある。

次の第三十八号(明治30年2月28日)には、「小説」は皐月の「恋
女房」のみで、「雑録」欄にモリエール原著、雪水坊訳の「非意
国手」があるが、いずれも以前の続編で、「恋女房」は第二十九
号の、「非意国手」は第三十四、第三十五号のそれぞれ続編であ
る。従つてこの号は一往「学術部」号と言えよう。第三十九号
は三か月以上も遅れ、明治三十年六月十一日に発行されている
が、この号も「小説」は小花醉樵の「夜番小屋」一編のみで、
「雑録」欄にはやはり「非意国手」が載せられ(完)となつてい
る。いうまでもなく「非意国手」は「Le Medecin Malgre Lui」
の訳で、明治三十年前後のモリエール熱の産物の一つと言えよ
う。この号は一見「学術部」号とも言えそうであるが、「文園」
欄に、新体詩・和歌・俳句などが他の号より目立っており、「文
学部」号としようとした意図はうかがわれる。

次の第四十号（明治30年7月25日）は、全巻あげて幸田露伴の「水上語彙」にあてており、この雑誌にはかつて見られなかった新傾向を示している。アイウエオ順に語を配列し、全一〇〇頁に及んでいる。露伴はその「序」で、

明治二十六年予支那の史家が所謂倭寇の事に據りて小説を為さんと欲したることありき。当時おもへらく、八幡船上の好漢を写さんとせば、須らく先づ水上の事を知るべしと。乃ち雑書を涉獵して、事の苟も我が文を作るに資す可きものは、散木を棄てず鶏肋を辞せず、皆採録して漫然一冊子を成しぬこれ此篇の成れる所以なり。

此篇既に成つて意猶甚だ満たず、倭寇の事を叙せんとするの念もまた萎へぬ。たまく大橋乙羽君光村利藻君、予を從憑してこれを智徳会雑誌に寄せしむ。

と記している。まさに「學術部」号としてふさわしいものと云える。続く第四十一号には「小説はなく、「論説」欄に平田禿木の「グレエ氏春の歌」があり、三十九号同様「文園」欄に、新体詩・和歌・俳句などが比較的多く掲載されていて、「文学部」号としての面目をかううじて保っている。先にあげた「一葉全集（再版）」についての記事はこの号に発表されたものである。次の第四十二号（明治30年10月25日）は、文学的なものとしては、

「雑録」欄のモリエール原著、雲水坊補訳の「おしつけ女房」が見える程度で、これは次号にわたって掲載されているが、翻案である。

第四十三号（明治30年12月5日）は、

仏国文豪評論

山脇山月

エミール・ゾラー

松窓子

道楽殿様

アレキサンドル・デュマ原作
山 月 訳 補

を載せ、更に「雑録」欄に前掲「おしつけ女房」とともに

ゼオルジ・オー子一原作

山 月

伯爵夫人

雲水坊

の第一回が掲載されている。姑洗はこの作品の前文として「仏蘭西文学の研究と我智徳会雑誌」と題して、

……第一着として本号より、仏蘭西文豪評論益々光焰万丈ならしめ、加ふるに、ゼオルジオー子一が「最後の愛」てふ実に六十四版を重ぬるに至りたる六百余頁の大傑作を、山月子が才筆と、雲水坊子が健筆とにより、「伯爵夫人」と題して数月にわたり掲載せんとす。

と紹介し、更に

来春一月十日発行の我智徳会雑誌は、新衣を装ふと共に改

題し、仏蘭西文学評論悲劇壇劇凡て仏文学に關する一冊をなして、徐ろに三十一年の文壇に頭れんとす。

とある。次の第四十四号(明治30年12月30日)は、前号よりの「道楽殿様」と「伯爵夫人」を連載しているが、「智徳会雜誌」という誌名はこれをもって終ることになる。結局、第三十六号で宣言した「一大改革」は、不十分な形でしか実現されず、第四十三号の「仏蘭西文学の研究と我智徳会雜誌」に示されたように、明治三十一年に入つて発行された第四十五号(2月15日)は、号数を継承しつつ「忍ぶ草」と改題されている。同号の「改題に就きて」の中に

現今吾文壇に、清妍なる英文の妙趣を論じ、幽遠なる独文の思想を評する者は比々多しと雖も、独り仏文の絢爛多趣を鑑賞翫味するもの、少く、加ふるに、斯道先達の頻りに謙讓して、それが刻苦慘胆たる研鑽の跡を、篋底深く蔵して、世に公示するの寥寥たるに、斯くてはいつの日にか吾文壇に、仏文思想の輸入移植せられむやを慮るの余り、今はひたすら彼の国の風潮を伝へまほしく、又には、仏文を攻めむと思ふの士も多からむに、さる人の手引にもかなど、かくは自らをも揣らずして茲に「忍ぶ草」を発行するに至りしなり。然れと幸にしてかゝるよしなき業が、異日吾文壇

に積密委曲の仏文研究を喚起するの導火ともならむには、我等の喜ひ何ぞ及かんや

とあるように、収録された作品は大部分がフランス文学である。最初に

LETTRE DE MONSIEUR LE PROFESSEUR MICHEL

REYON

LETTRE DE MONSIEUR LE PROFESSEUR EMILE

HECK

とあつて、フランス人ルボンとエックの仏文が掲載されている。

ルボンは当時、東京帝国大学法科大学の講師であり、エックは同大学文科大学の講師であつた。続いて

HŌJŌKI S.TSUCHIYA

懐 旧 フランソア・コッペ原作

緑 処 アレキサンドル・デュマ原作

木 枯 雲水坊

「かもみる」の花冠 ゴルブノフ原作

氣の病(上) モリエール原作

うむする

柴の枝折

長田柳溪

あらし

トニー・レヴキロン原作

豊次坊

BONJOUR. MONSIEUR

ジュアン・リシユパン原作

美 鷗

悪因縁

ザビエー・ド・メイストル原作

常陸坊

親ごころ

ラチボンヌ原作

さんげつ

知らぬ少女

醉 茗

那木の下草

佐々木 昌綱

嗚呼、あるふほんす、どおでえ」

山脇 山月

最初の「HOJOKI」は作者長明の略伝と冒頭部の仏訳であり、「柴の枝折」は短歌、「知らぬ少女」は詩、「那木の下草」は隨筆であるが、他はフランスの作品の翻訳または仏作家の近況を伝えるものである。ただし「氣の病」は翻案である。最後に、冒頭のルボン及びエックの文章の日本語訳と両者の簡単な紹介とがある。

このように、「智徳会雑誌」は遂にフランス文学紹介誌となつ

たが、発行所はやはり智徳会であり、発行兼編輯人は泉谷氏一

である。残念ながら管見に入つた「忍ぶ草」は一冊のみであるが、その後、明治三十一年七月十日発行の第四十五号があることは、同号に上田敏が「LE ROSEAU ET L'ASTER」を發表していることによつてうかがわれる(定本上田敏全集第八巻)。しかし「定本上田敏全集」の編者も同号は未見とのことである。ともあれ、「教育勅語ノ精神ヲ貫徹センコトヲ期」した「智徳会雑誌」が、やがて文学的傾向に流れ、遂にフランス文学専門誌となるに至つたことは興味ある事実と言わねばならないであろう。恐らく「忍ぶ草」はわが国フランス文学誌として、草わきの存在の一つと言つてよいのではなからうか。

(追記)

前号所載の「智徳会雑誌」と樋口一葉」に、次のような誤植があつた。ここに謹んで訂正するとともに、御指摘下さつた和田繁二郎・伊藤嘉朗両氏に御礼を申し上げる次第である。

(誤) (正)

157頁上段7行目

新新社 新世社

158頁上段2行目

申すへきや 申べきや

158頁上段7行目

あしを 御あしを

159頁下段9行目

催促 催促

165頁下段注1の1行目

新世社 新世社